



姉が北朝鮮にいるなんて、  
誰にも言えなかった。

棄民政策によって引き裂かれた姉妹  
世界一取材制限の厳しい国を舞台にした  
異色のドキュメンタリー！

# ちょっと北朝鮮まで 行ってくるけん。



企画協力・撮影 伊藤孝司 撮影 利満正三(朝日放送テレビ) 熊谷均 前川光生 西田豊  
編集 前島健治 助監督 鈴木響 オンラインエディター 中田勇一郎 効果 整音 高木創  
音楽 渡邊崇 音楽助手 中原実優 制作 監督 撮影 島田陽磨  
助成 文化庁文化芸術振興費補助金(映画創造活動支援事業)|独立行政法人 日本芸術文化振興会 協力 朝日放送テレビ テレビ東京  
製作・配給 日本電波ニュース社 2021年/日本/カラー/115分



かつて、日本から

“未知の国”に渡った女性たちがいた—



### 葛藤、断絶、そして58年ぶりの劇的な再会…

熊本県で訪問介護の仕事をしている林恵子、67歳。子供たちはすでに独立。休日は友人らとカラオケや居酒屋に通い、一見平穏な日常を送っている。しかし恵子には、家族や親しい友人にも語ってこなかったある秘密があった。それは実の姉が北朝鮮にいるということ。20歳上の姉、愛子は1960年に在日朝鮮人の夫とともに北朝鮮に渡っていった。渡航後、手紙で伝えられる姉の変貌ぶりに恵子はやがて落胆し反発。そして絶縁する。その後、日朝関係は悪化し、互いに音信不通の状態に。58年の歳月が流れていった。

そんなあるとき、姉の消息が知らされる。人生の残り時間が少なくなる中、姉への想いが再び頭をもたげ始めた恵子。「拉致されたらどうする」という子どもたちの反対を押し切り、恵子は訪朝を決意。人生初めての海外旅行が北朝鮮となった。“謎の隣国”で目にする未知の世界—。それはその後の恵子の人生も変えていく…。

半世紀以上にわたり、政治や時代に翻弄されてきた家族たちの姿を描く異色のドキュメンタリー作品。



### 帰国事業とは

1959年から1984年にかけて行われた在日朝鮮人とその家族による北朝鮮への集団的な移住。日朝両政府のそれぞれの思惑から始められ、日本中のメディアも北朝鮮を「地上の楽園」と持ち上げ、後押しした。9万3千人以上が参加したが、そのほとんどが実際は朝鮮半島南部、現在の韓国の出身者だった。国民的な熱狂の中、送りだされた「帰国者」の中には日本人の妻、約1800人が含まれていた。「3年経てば里帰りできる」。当時流布されていたその言葉を信じ、未知の国に渡った日本人女性たち。しかしその後日朝政府間の対立が続き、彼女たちの消息はほとんどわかっていない。



ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん。公式HP  
<http://chottokitachosen.ndn-news.co.jp>



**6月10日** [北方シネマ]  
日(金) 18:00

北九州市小倉南区北方 4-2-1  
北九州市立大学 A-101 **上映後に出演者  
による講演あり**  
080-6458-1184

**6月11日** [小倉昭和館]  
日(土) 9:30

北九州市小倉北区魚町 4-2-9  
093-551-4938 **上映後に出演者  
による講演あり**

**6月19日** [上津役シネマ]  
日(日) ①10:30  
②13:00

株式会社ニッサブ2F 夢宙空間ホール  
北九州市八幡西区上上津役 4-22-2  
090-8407-9785

映画鑑賞料：予約 1000 円 | 当日一般 1200 円 | シニア・障害者 1000 円 | 大学・高校生 500 円 | 中学生以下無料